

菊池短歌会

1月詠草

いさぎよき銀杏の散華自がめぐり黄に埋めつくし
冬に真向かふ 岩永 典子
いつの間にわが丈こせし孫達か手をとられつつお
城をめぐる 梅田 昭子
足麻痺の夫の革靴玄関に光放ちて待つ正月を
北島 多喜
沈丁の花の芽いまだ堅くして耐へる寒の庭のひ
そけき 黒田 衣子
しきりなる落ち葉終はりし白木蓮はや枝先に花芽
光れり 古賀 勝士
ひつそりと後に残らむ鋏一丁歳八十となりて購ふ
竹野美智代
神さびし阿蘇鞍岳のふところに山河恋ひつつ老い
たり吾は 中川 愛子
大祖父の芙蓉ももいろぬばたまのむかしの電話が
不意になり出づ 怒留湯健蓉
お下りのみ雪もあらた年あらたすでに視力の限界
にゐて 村上 咲江
生活のリズム異なる弟妹と万事ゆだねて年を迎へ
ぬ 山代 静子



万句の里俳句会

1月句会

神の沼神慮の如く風花す
一片のこぼれて風の梅となる
神の庭隈なく照らす大焚火
甲子園目指す少年大破魔矢
風を聴く水仙耳を傾けて
暁の月光もまた凍てしをり
初弓の射技一点を貫けり
仰ぐほど深まりてゆく冬の月
一輪の眩しかりけり寒椿
父母